379 しっかりと
動かせ心
体とも
我等動物
哺乳類なり

380 な忘れそ
苦しみのなか
育つもの
喜びのなか
萎れゆくもの

381 二進法
無機的論理
蔓延し
我魂は
逼塞せんか

382 天と地の
狭間に在りて
瞳上げ
手をば伸ばさん
あの星にまで

383 他を讃え
幸求め
殺到す
大樹の陰に
幸はなく

384 北帰する
鶴の背交の
輝きに
切に祈れり
その幸ひを

385 麦笛を
吹きおる若き
農夫の瞳
丸き青空
横切る燕

386 夏の午後
小川の橋に
並び座し
流れに足を
浸せしあの日

387 毒杯を
仰がんとする
ソクラテス
瞳にありし
アテネの夕空

388 港をば
内には矜
秘めおれば
空宵くして
人生開く

389 結婚は
ゴールでもあり
スタートよ
手を取りあって
行け遥かまで

390 子供には
旅をさせよと
聞きしかど
なお胸ふたぐ
出立の朝

391 人類は
自ら栄え
亡びるや
造りしものを
制禦しかねて

392 未踏峰
攀じんとすれば
疲漕ぎに
だらだら登り
更に痩尾根

393 梢なる
出ゆく船を
追尾する
鴎の乱舞
旅立ちの歌

最後の一葉
朔風の
吹き攫ひゆき
冬果てんとす

394 静謐の
裡に見詰める
細胞の
顕微画像は
星雲に似る

395 河の辺に
柳青みて
雲雀啼き
春 酣と
なりにけるかも

396 一人だけ
輝くことの
虚しさに
はや気づけかし
わが同朋よ

397 春雨の
川面に浮かぶ
花筏
憂いを載せて
流れ往きけり

398 己ほど
幸な人
あるまじの
想いふと湧く
朱夏の午後

399 若者よ
地球とガップリ
右四つ
上手投げにて
投げ捨てよかし

400 川の辺の
嬉し悲しに
登りし木
現在も春毎
花付けおるか

401 我が視野に
駆け行く子らの
後影
遠く収めて
嬉し秋の日

402 宇宙をゆく
惑星の如き
我が人生
汝が人生と
交り離る

403 はらはらと
どきどき重ね
子等皆は
忽ちにして
旅立ち往けり

404 暖かき
父の背中と
母の膝
甘えて子らは
育ちゆくなり

405 寒中に
僅かに青む
麦の芽に
いのち静かに
満ちゆきにけり

406 何処までも
見果てぬ夢を
追い求め
老いさらばえど
我に悔ひなし

407 嵐過ぎ
木末に残る
柿の実に
我喝采す
その健気さに

408 北帰する

鵜に会ひぬ
旅の空
その幸いを
願いぬるかな

409 筑波嶺の
たおやかな峰
印象す
関東平野
大きな拡がり

410 冬の陽を
背中に浴びつ
瞼閉じ
木枯の音に
耳すましおり

411 凍天の
昴の如く
人生を
さんざめきつつ
渚く渡らむ

412 旅の空
袖振り合えど
名も告らず
微笑遺し
離りて往きぬ

413 小舟もて
勇魚を追ひし
そのかみの
海人の心根
我も継ぎたし

414 往く河の
流れに惹かれ
佇めば
橋上人と
皆は噂す

415 本質を
掴めと告げて
にっこりと
去りゆきにける
小柄な教師

416 ミモザ咲き
小綬鶏の声
研して
静かに明ける
西伊豆の朝

417 苦しみと
悩み潜りて
やって来よ
水平線にて
我君を待つ

418 人生は
巡礼なるべし
あまりにも
辛けにし愛の
多かりしかば

419 枕辺に
母の朝餉の
音届き
雀も鳴きて
我帰省せり

420 空をゆく
鴎の羽根に
人生の
不安と希望
あわせ載せた日

421 忘れるな
何時何処にても
変りなく
君が纏へる
銀河の微光

422 我夢は
片鱗遺し
消えゆけり
日々の方便の
満ち干のままに

423 我もまた

苦しむ人の
傍らで
傍若無人に
打ち興じしか

424 水仙に
こだわる心
溶かしなば
心の隅に
蝋梅香る

425 夕星と
月と火星と
並びいて
心の皺も
伸びゆきにけり

426 亀のごと
巨な岩に
しがみつき
暖をとりおり
ゆく夏の渓

427 その昔
我魚なるか
潮騒に
汐の満ち干に
心はなやぐ

428 蕪の根は
葉かげにどんと
坐りいて
澄みし白さに
満ち溢れたり

429 白梅を
見上げ想ほゆ
かの朝に
逼路の肩に
ありし淡青

430 さとるとは
さとれぬことを
さとること
ふと胸におつ
雑踏の中

431 雪椿
苦き想いは
消えやらず
何故に傍観
拱手したるか

432 我生は
似非なりしかと
問いおれば
憂いは深し
アジサイの花

433 ハッブルの
宇宙の如く
束の間も
うつり変わりぬ
我なる現象

434 マンサクの
花咲きそめて
春の宵
躊躇ひがちに
暮れんとす

435 人生の
隘路を抜ける
手がかりは
感謝なるかや
凍天の星

436 同朋よ
宇宙の愛を
身にまとい
光背として
生きて行かまし

437 羽化をする
蜻蛉の如く
我もまた
面目新たに
生きてゆかまし

438 足摺の
岬に立てば

水平線
やや弓なりに
地球は丸し

439 瞼閉じ
波涛の音に
包まれて
海空に満つ
室戸岬よ

440 河口にて
北に目やれば
山脈は
こよなくやさし
物部川かな

441 仁淀川
我佇ちおれば
清流は
我が胸までも
青く染めあぐ

442 四万十の
青き流れの
育みし
数多の人は
いかにありけむ

443 水底に
貝を求めて
どこまでも
潜りてゆけば
鼓動は昂し

444 栴檀の
優し葉擦れに
むすびたる
昼寝の夢は
叶ひたるかや

445 海わたり
山をこえきて
旅の宿
故郷の庭に
在りし花咲く

446 何故に
かくも苦しき
生やある
私ではなく
何故に貴方が

447 寂滅の
光に浮かぶ
山河は
たおやかにして
懐かしきかな

448 街に居て
足裏の皮は
薄くなり
面の皮のみ
厚くなりけり

449 春兆し
足摺の鯛
健気にも
室戸を越えて
明石を目指す

450 野分にも
風靡されざる
しなやかさ
花それぞれに
宿れと祈る

451 鹿の子を
歯牙にかけたる
母獅子に
汝は憎しみを
抱きおるかや

452 寒紅梅
枝は虚空に
拡がりて
瑠璃の空には
春の入口

453 道草に
耽りて我は
真実の
生きる意味をば